

異文化間接触で語られる体験談

—日本語母語話者の働きかけとその役割を中心に—

鈴木 伸子

1. はじめに

1.1 日本語学習と社会の中での学習者

学習者が日本語を学ぶ目的はさまざまだが、その目指す所が、社会のどこかで人々と日本語によるコミュニケーションを交わして適切な対人関係を構築し、それに基づいて何らかの活動を行なう、という点では共通しているだろう。

こうして多くの学習活動が、社会におけるコミュニケーション場面を念頭に置き、そこでの意思の疎通をはかるためのトレーニングとして実施されている。その中には、教室外における日本語母語話者（以下、NS）との接触場面を学習として活用するホームビジット（舩見蘇 1997、溝口 1995）やホームステイ（上田 1994、西條・中山 2000）のような試みがある。

筆者は、2000年の冬から2001年の夏にかけて、市内の四年制大学においてホームビジットプログラムを実施した（プログラムの詳細は鈴木 2004 参照）。参加者によるアンケートや感想文、フォローアップインタビューでは概ね成果があったという回答が大半だったが、中にはNSの対応に話しにくさや違和感を覚えたという声もあった。ここから、同じように学校外での接触場면을体験するといっても、NSの対応次第で接触場面の談話の様相が変わり、それに応じて会話参加者間の相互理解や関係性のありようも変わることが想像された。

人々の間の関係性構築のプロセスを分析する上で有益なのが、過去の体験に関する語りである。ガーゲン（2004）によると、「語りは、進行中の関係性の構成要素である一語りによってこそ、社会生活が理解可能で一貫性あるものとなるし、人々が互いに集まったり距離をとったりできる」（同：p327）という。つまり、体験談とは会話参加者間の関係性を構築する道具として機能する言語活動といえよう。

そこで筆者は、ホームビジットを通じて集めた会

話データを対象に、体験談を中心とする分析を行なうことにした。さらに、個人の価値観が如実に現われるとされる体験談同様、ストーリーはないものの、個人の主観的な意見も分析対象とした。

また、こうした会話データは短時間内におけるNSの働きかけと体験談の機能については解明できるが、日常的な状況下における長期的なNSの働きかけと体験談の機能については分析できない。そこで、ホームビジットの参加者のうち、寮ではなく一般の賃貸住宅に居住した2名のNNSを対象に、彼女たちが隣人の老婦人からどのような働きかけを受けて相互理解を構築したかについて、ナラティブ・インタビューを中心とする質的分析を実施した。

2. 先行研究

2.1 教室外で接触場면을体験する活動

ホームビジットには、NNSとの実際の接触場面で適切に対応できることを目指すインターアクション能力向上のためのプログラムとしての複数の実践例がある（尾崎・ネウストプニー1986、舩見蘇 1997、溝口 1995 など）。これらの活動の成果は、主に事後のアンケートやインタビューによって確認されたが、ホームビジットにおける実際の言語データを収集・分析する試みが少なかったため、家庭という文脈における接触場面でいかなる相互行為が繰り広げられているのかは不明な点が多い。

2.2 個人が体験を語ることの意味

言語学の領域で個人による過去の体験談（=narrative）を扱ったものとしてはラボブによる一連の研究がよく知られている（Labov and Waletzky 1997[1967], Labov 1972）。彼らによると、体験談には一定の構造があり、その中の評価 Evaluation と呼ばれるカテゴリーには話し手の価値観が表面化するという。

一方、社会構築主義の論客からは、体験談は単なる言語活動としてではなく、人々の関係性に意味を与えるものとして捉えられている。その中のひとり、ガーゲン「人々は語りを通して事象を体験し、まさに語りを通して他者とともに事象を正序し、「物語において他者との関係性を生きている」(Gergen, 2004:p248)と指摘している。体験談とは、話し手ただ一人による自己完結的な言語活動ではなく、他者との関係性構築と同時に展開される言語活動であることがわかるだろう。さらに、本研究のような初対面の接触場面であれば、単なる初対面ではなく、文化的背景の異なる人間との関係性が体験談を媒介にして構築されることとなる。つまり、そこには常に異文化理解という側面が含まれることを指摘しておきたい。

3. 研究の概要と目的

本研究ではまず、日常的な状況下における異文化間接触でNSが体験談を語る時、その会話にはどのような談話形成プロセスが見られるのかに注目した。まず、「家庭」という日常的な状況での接触場面を体験するホームビジットプログラムを行ない、このプログラムでどのような言語活動が体験できるのかを確認した(3.1/鈴木 2004)。次に、このプログラムを通じて得られたデータから、主観的な視点に基づくNS発話が、談話形成上でいかなる働きをしているのかを談話分析によって明らかにする(3.2/鈴木 2005a)。次に、NS/NNS双方によって語られた体験談を抽出し、その構造化のプロセスと双方の役割を分析した(3.3)。一方、談話上の分析だけでは異文化間接触による長期的な関係性の構築は実証できない。そこで、2名のNNSとその隣人NSの事例に対し、体験談がどのようにNNSとNSの関係性を構築したか、回顧型のナラティブ・インタビューを中心とした質的分析を行なう(3.4/鈴木 2005b)。さらに、NS側が接触場面と母語場面の双方で体験談の構築プロセスをいかに変えているのかを比較検討する(3.5/鈴木 2006 印刷中)。これらの分析を通じて、NS/NNS間で語られる体験談がコミュニケーションのうえでどのように機能しているのか、さらにNS側の働きかけという観点からは体験談の機能がどう位置づけられるのかを実証する。これらの結果により、多文化共生社会を実現するため、ホスト側のNSは、接触場面におけるコミュニ

ケーションでどう振る舞うべきか、さらに、それを踏まえNSとNNS双方への教育プログラムを提案する。

3.1 ホームビジットで知る日本社会の日常

短期留学生のNNS19名(1回目15名・2回目14名※連続参加10名)がペアを組み、日本人協力者10家庭に対して行なわれた二回のホームビジットを体験した。企業人と呼ばれる人々も、家庭という場で家族とともに過ごす時には、初対面であってもより打ち解け易く、参加者たちとの間で打ち解けた会話が展開された。但し、一部の参加者からはうまく話せなかったという声が聞かれ、その理由のひとつとして、一部NSの発話の特徴が談話形成を促進しなかったのではないかと疑問が浮上した。

3.2 談話展開を促進するNS発話の特徴

ホームビジットで収集した会話データのうち、同じNNSペアにも関わらず、談話が大きく発展した/しなかった二軒のNS協力者宅での会話を比較し、それぞれのNS発話にどのような違いがあるのかを分析した。

すると、談話が発展したNS宅では、NSがNNSの問いに答える時に「自分は…」「私の家では…」という個人的経験や主観に基づく発話をしており、一方、さほど談話が発展しなかった会話では、「日本では…」「みんな…」という辞書的かつ世間一般の常識に基づく発話をしていることがわかった。

これによって、初対面の接触場面におけるNSの発話態度として、社会一般の常識や、辞書的な知識に基づく発話をするよりも、個人の経験や主観に基づく発話をする方が、談話的には発展することが示された。

3.3 個人的価値観に基づく体験談の形成プロセス

ホームビジット席上の会話を促進した要素として個人の体験や価値観に基づくNSの私的な発話が指摘できることから、次は個人の体験した出来事がストーリーとして構造化され、なんらかの価値観が反映された体験談に注目することにした。

分析対象としたのは、ホームビジットで語られた体験談(NS体験談5話:NNS体験談6話)である。これらの体験談を通じて、NSがどのようにNNSに働きかけしているかに注目するため、体験談の構

造を分析した。構造を分析することで談話の形成プロセスがわかり、その際、どのように NS が関与しているかが明らかにできるからである。

ラボブによると、体験談には<設定 ORT—出来事 ACT—評価 EVL>の順に展開される標準的な構造が存在すると言う (Labov1972)。ところが、本データで収集した NNS 体験談にはいずれも評価カテゴリが不在の構造になっていた。しかし、NS 側がその部分を付与することで結果的に標準的な構造が構築されることが分かった。

この結果によって、評価カテゴリとは話し手の価値観や主観に支えられていることから、このような体験談の協働構築は異文化理解の手がかりとなる言語活動ではないかという示唆を得た。

3.4 日常で聞いた NS 体験談と NNS の異文化理解

短時間に終了する会話での体験談の分析からは、家庭という状況で語られた体験談の構造化プロセスと会話参加者間の相互行為の有りがかりにできるが、長期的なスパンにおける NS-NNS の関係性構築と体験談の役割については明らかにならない。

そこで、寮ではなく賃貸住宅に住み、隣人の NS との間で親しく交流を続け、その体験談を聞く機会に恵まれた NNS 二名に対するナラティブ・インタビューを行ない、フィールドワークによるデータも加えて質的な分析を行なった。

その結果、明らかとなったのは、NNS の日常生活に対する積極的な関与が交流を築き、さらにその体験談への共感や理解を可能にすることが分かった。

3.5 体験談の構造化における接触・母語場面の比較

異文化間で語られた体験談の役割をさぐる上で、構造の協働構築やそこからもたらされる関係性の構築も、同文化間における体験談の場合と比較をして初めて異文化接触特有の特徴として指摘できる。

そこで、ホームビジット同様に一般家庭における母語場面を設定し、そこから得られた会話データとホームビジットの会話データを比較し、両者に現われた体験談が構築されるプロセスを分析した。

すると、両データいずれも体験談の協働構築と言える現象はあったが、その現われ方が異なっていた。そこで次に、協働構築を実現する具体的な道具として活用される「共話」¹という言語現象の、談話全体における出現傾向を調べた。その結果、共話によ

って実現される体験談の協働構築は、母語場面の場合、聞き手側 NS の談話に対する積極的な関与に依拠していることがわかった。従って、協働構築を実現する NS の評価付与は、そもそも NNS の談話形成への関与が希薄なことに起因する可能性があることもわかった。

4. まとめと今後の課題

本研究は、教室外活動の重要性を鑑み、ホームビジットプログラムをはじめ、主に家庭や一般社会のなかでデータ収集を行なって分析を行なうものであるが、未だ進行中でもあり、追加分析の必要な箇所も少なくない。

例えば、ビジターセッションのように学校内で行われる接触場面を体験する教育実践もあり、学校外における接触場面やコミュニケーション体験の特質や効果について語る上では、やはり教室内における接触場面との比較分析が必要と思われる。今後の課題としてまずはこの課題に取り組む予定である。

こうした研究を積み重ね、社会文化的な文脈におけるコミュニケーションのなかで、NNS と NS の異文化理解がいかんにして促進されるかを探求し、真の多文化共生社会を実現すべく、日本語教育および異文化間教育に対して提言をしていきたい。

注

1. 話し手と聞き手が補いあうようにひとつの発話を語る日本語に特徴的な現象。水谷は、「きのうちよっと鎌倉へ…」と言いかけた相手の話を引き取って「あ、お出でになったんですか。」と相手方が発言する例を挙げている (水谷 1993 : 6)。

参考文献

- 植田栄子 (1994) 海外日本人家庭で行うホームステイプログラムの有効性—タイにおける日本語学習者の場合』『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』2 pp.213-232
- 尾崎明人・ネウストプニー,J.V (1986)「インターアクションのための日本語教育—イマージョンプログラムの試み」『日本語教育』59号 pp.126-141
- 西條美紀・中山由佳 (2000)「短期ホームステイプログラムにおける日本語学習者とホームステイファミリーとの相互交渉—質問紙調査の結果から」『日本語教育国際シンポジウム Proceedings』韓国日本学会・日本語教育学会 pp.320-325
- 鈴木伸子 (2004)「日本事情クラスにおける家庭訪問プログラムの試み」『世界の日本語教育<日本語教育

- 事情報告編>』7号 pp.209-225.
- 鈴木伸子 (2005a) 「留学生に対する日本人協力者の個人化した説明が談話の展開に与える影響」 『リテラシーズ—ことば・文化・社会の日本語教育へ』1(1) pp.55-68
- 鈴木伸子 (2005b) 「地域住民との日常的交流がもたらした滞日留学生の文化理解—ある韓国人留学生と日本人老婦人の事例から」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』28号 pp.61-76
- 鈴木伸子 (2006 印刷中) 「異文化間接触における体験談の協働的構築—評価カテゴリーの形成をめぐる」 『国際教育評論』3号
- 溝口博幸 (1995) 「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育—『日本人家庭訪問』の場合」 『日本語教育』87号 pp.114-125
- 舛見蘇弘美 (1997) 「日本人との接触場面のためのインターアクション能力の開発—海外 (オーストラリア) 学習者の日本人家庭訪問を通して」 『平成9年度日本語教育学会春期大会予稿集』日本語教育学会 pp.45-50
- 水谷信子 (1993) 「『共話』から『対話』へ」 『日本語学』4月号 pp.4-10
- Gergen, K. J. (1994) *Realities and Relationships Soundings in Social Construction*. Harvard University Press (永田素彦・深尾誠訳 (2004) 「社会構成主義の理論と実践：関係性が現実をつくる」 ナカニシヤ出版)
- Labov, W. (1972) *Language in the inner city*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Labov, W. and Waletzky, J. (1997[1967]) Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1-4), 3-38. (Original Edition, In J. Helm (Ed.) *Essays on the Verbal and Visual Arts: Proceedings of the 1996 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society*. Seattle: University of Washington. 12-44)

すずき のぶこ / アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター
qwb01203@nifty.com